

俳句甲子園松山大会

憧れ7年分 初舞台感動

松山学院2年土居さん

を覚えた。5年生から中学3年まで愛媛新聞カルチャースクールのジュニア句会に通い、短い言葉に思いを込める楽しさ、語彙(ごい)

が増える喜びを味わってきた。小5の夏休み、宿題に出された「新聞づくり」で選んだ題材は俳句甲子園。大街道商店街で愛媛や沖縄県の選手にインタビューして記事をまとめた。以降も毎年のように観客として足を

運び「いつか自分も」と思いを募らせてきた。高校2年になり、1年生4人を誘って学校としても初出場となった。予選リーグでは自作の句「長閑さやテラス行き交う車椅子」蚪

蚪が飛ぶ水面に映る雲の中」を披露し、「自分の句をいろんな視点で読んでもらえ楽しかった。ここに立って感動した」。リーグ2試合目では緊張で言葉に詰まり、両手で顔

を覆う場面も。悔しさも楽しさも味わった初舞台を終え「来年はもっと自分の思いを語れるようにしたい」とほほ笑んだ。

(小田良輔)

7年分の思いが詰まった初舞台だった。23日の俳句甲子園松山大会に初出場した松山学院。「一緒に出よう」と仲間を集めた2年の土居千紘さん(16)は、小学校5年の時から俳句甲子園に憧れ、この日を迎えた。「念願がかなった。すごく楽しい一日だった」とさすがにうれしい表情を見せた。

(1面参照)

小学2年で俳句コンテストに入賞し、作句の楽しさ



小学生の時から憧れてきた俳句甲子園でマイクを握る土居千紘さん—23日午前、松山市湊町7丁目